



## 2 モディ政治の4年間：新しいヒンドゥー至上主義（中溝和弥）

モディ政治の4年間でどのように捉えればよいか。モディ政治の特徴は、経済成長と新しいヒンドゥー至上主義を組み合わせた両刀遣い戦略と表現できる。すなわち、2014年総選挙で大々的に掲げた経済成長モデル「グジャラート・モデル」を推進すると同時に、より洗練された形で宗教的少数派を抑圧する新しいヒンドゥー至上主義の実践を組み合わせる方式である。本講演においては、ヒンドゥー至上主義が台頭する経緯を、インド社会経済の構造変動、後進カーストの台頭と会議派支配の衰退という観点から説明した上で、ヒンドゥー至上主義勢力の戦略を時代を追って説明し、現在の新しいヒンドゥー至上主義が出現する経緯を解き明かした。

「ヒンドゥー国家」の実現を目指すヒンドゥー至上主義勢力は、「ガンディーを暗殺した党」として、長年にわたりその勢力を伸ばすことができなかった。党勢を拡大するために必要なのはヒンドゥー教徒の信仰心に訴えかける動員であり、最初に成功した大規模な動員は、

1966年に展開した雌牛保護運動であった。ヒンドゥー教で聖なる存在とされる雌牛をシンボルに掲げた運動は数十万人を動員することに成功したが、翌67年に実施された総選挙では思うような成果を上げられなかった。そこで動員の手法は、より過激な宗教暴動へと変化していく。1984年から開始したアヨーディア運動とこれに伴う宗教暴動は、支持拡大に確かに貢献したものの、中央政府の維持にはつながらなかった。ここでBJPはジレンマに直面する。すなわち、より広範な支持を集めようと宗教的主張を弱めれば親団体であるRSSの支持すら失いかねない。だからといって宗教的主張を強め、宗教暴動にまで発展すれば、今度は中央政府を維持することができない。2002年グジャラート大虐殺を経て2004年総選挙で敗北したBJPにとって、このジレンマを乗り越える事が喫緊の課題であった。

解決策を提示したのが、他ならぬモディであった。モディ政権下では、ラヴ・ジハード・キャンペーンに始まり、雌牛保護団などの自警団組織が暗躍し、時には「牛肉を食べた」という噂だけでムスリムが殺害されるリンチが増加している。同時に、小規模の宗教暴動も2016年までは増加傾向を見せており、宗教的少数派に対する小規模ではあるが広範な暴力が拡大した。これら活動の主体は自警団組織であるため、政府は直接の関与を否定することができ、かつ小規模であるためメディアの注目も大暴動ほどは集めない。いわば、これまで宗教暴動の際に受けたような批判はかわしつつ、同時にヒンドゥー的価値観を広範な暴力を用いて広めようとしている。より洗練されたヒンドゥー至上主義の展開である。

ただし、この両刀遣い戦略によって1年後に予定されている総選挙でBJPが勝利を収めると予測するのは時期尚早であろう。直近のゴーラクル下院選挙補選が示すように、来る下院選挙で考慮すべき要因は三つある。第一が、2015年ビハール州で成功したような、後進カーストと指定カーストが大連合を組む連合の成否である。第二が、「グジャラート・モデル」で解決を約束した雇用問題と物価上昇の解決である。最後が、新しいヒンドゥー至上主義の今後の展開である。上記二つの条件次第によっては、宗教対立が激化する可能性も捨てきれない。来る総選挙において、これら三つの要因は重要となろう。